

「アビラケツノミコト」に於ては、
突如、麻原彰晃に訪れた啓示が、
オウム真理教による破壊的活動
の原動力になりました。

一九八五年五月、神奈川県三浦海岸、
麻原は解脱・悟りの成就を誓願し、
頭陀を行ってまいりました。
頭陀とは、この世に對する執着を、
禁欲的生活によつて絶つ仏道です。
恐らくは粗衣をまとひ、
野宿をしなかり、
修行に勤しむ日々だった
ことでしょう。

そのようなるある日、麻原は神を礼拝してまいりました。
五位を大地に投げ出しての礼拝を繰り返す。仏教の伝統的な修行
です。そのとき麻原は、天から降りてきた神の言葉を聞いたのです。
言葉の意味を調べたところ、
「アビラケツ」はサンスクリット語
であり、アビラケツノミコトは「神軍を率いる光の命——戦いの中
心となる者」のことでした。神は麻原に、西暦二一〇〇年から二二
〇〇年頃にジャンバラウが地上に興ることを告げ、その実現のために
アビラケツノミコトとして戦うように命じたのです。

そのときでして、ジャンバラウ建国の意志が、麻原の脳裏に刻印さ
れたのは、そして、その意志の実現こそが、麻原が信徒に對して破壊
的活動を指示した目的だったのです。

この破壊的活動について麻原は、
「ウアジラヤ」の教義に基づく章
現代人の救済すなわち「ウアジラヤ」の救済として説きまゝ序
た。現代人は悪業をなしているために必ず、来世は三悪趣に転生す
る。かから現代人を救済するには、武力を用いて地球上にオウム真
理教の国家を樹立し、真理の実践をさせる以外の道はない。あるい
は「ポア」しかない。

そして、麻原は一九九四年六月頃、
自動小銃の製造に関する指示
の際、私にも述べました。
「ウアジラヤ」は、「アビラケツノミコト」に於ては、
「オウム真理教」が
始まりだった。

麻原は啓示を体験した当時、
オウム真理教の前身であるオウム神
仙の会（以下、オウム真理教と共に、オウムまたは教団と記します）
を主宰してまいりました。この会は古来のヨガ・仙道・大乘仏教・密教
などの系統の修行とする集団でした。宗教団体はまだ名乗って
いませんでした。会員数は、一九八五年一二月の時点でわずか一五人

- *1 シャンバラとは、聖人が住み、全宇宙の英智を有する幻の国。
- *2 以上の麻原の啓示体験に関する記述は、日トワイライトゾーン 一九八五年一〇月号と参考にした。
- *3 三悪趣とは、地獄・餓鬼・動物の三界。
- *4 真理とは、精神を高める教人のことであり、オウム真理教の教義を指す。
- *5 「ポア」は救済の対象を、その生命を絶ち、より幸福な世界に転生させること。
- *6 団体名と会員数は、警視庁作成資料による。当時の団体名は、オウムの会だった。

麻原も彼の主張する「最終解脱」は成就しておらず、修行途上
 下した。下すから麻原は会員にして、先生下はあつてもあくまで
 も人間であり、神のような絶対的存在下はありませんでした。
 しかし、マンパワも、財力も、政治力も、理想国家の建設と結
 びつくものは何もなし状況において、それを着想するとは――。そ
 の後実際に、麻原はシヤンバウ建国も実現すべく、教団と異例の速
 さで成長させていきました。

一九八六年 八月 麻原が最終解脱を主張 九月 出家制度発足
 出家者教一五人、一〇月 東京本部移転 会員教約
 三五〇人

一九八七年 二月 大阪支部設立 会員教約六〇〇人、七月 才
 ウム真理教と改称 東京本部移転 信徒教約九〇〇
 人、一〇月 福岡支部設立 信徒教約一三〇〇人、
 十一月 大阪支部移転 二二一〇月支部設立、一
 二月 名古屋支部設立 信徒教約一五〇〇人
 四月 札幌支部設立 出家者教約五〇〇人 信徒教約
 二〇〇〇人、八月 富士山総本部道場完成 出家者
 教約一〇〇〇人 信徒教約二五〇〇人、十一月 東京
 総本部道場設立 信徒教約三〇〇〇人、十二月 仙
 台支部・高知支部・金沢支部・広島支部・ホニ支部
 設立

一九八八年 二月 京都支部設立、三月 名古屋支部移転 出家
 者教約二五〇人、六月 和敬山支部・横浜支部設立
 八月 宗教法人登記、一二月 出家者教約四〇〇人
 一九九〇年 二月 麻原が教団関係者二五人が衆院選に出馬(全
 員落選)

そして麻原は、教団の武装化に動き、信徒に対して教々の破壊的
 行為を指示するに至った。

「神の言葉も聞く」といふ夢のような体験が、麻原のあ
 の途轍もな行動の動機となり得るのか？ それもその
 して受け止められ得るのか？ この種の体験の影響力について、疑
 問を抱かれる方もいらっしゃいます。

このらが宗教的経験は、その経験者にとってはおくまでも現実と
 して知覚され、場合によつては、経験者の人生をも一変させるほど
 *1 当時、重大事件に巻き込まれた元信徒は入会してはなかった。これらの元信徒の入会
 前に、武力による国家の建設を麻原は発意していた。

*2 年表の一部は、警視庁作成資料を参考にしている。

*3 大抵、武装化の開始前にも、麻原は殺人などの違法行為を指示していた。
 識的に述べた結果、宗教的経験と現実として認識するに至ったと思われ、あ
 りては、宗教的経験の諸相(若狭書店)

*4 精神医学者は麻原に因りて、W・J・エームス(「宗教的経験の諸相」若狭書店)
 による宗教心理学の立場から、「一度生まれ回心」者であり、特異な宗教体験に
 よつて回心した二度生まれ回心」者とは考えられ、その旨を述べている。

前者は「漸次的」回心したあり、自らの意志によつて宗教的「考人」方や行動が少
 不随意的に起る。後者は「突如」回心したあり、潜在意識の作用による
 (次頁)

の影響力を秘めていられる。これは、宗教に関する心理学・精神

医学の多くの研究論文が報告し続けていることである。宗教的経験とは、宗教的意味合いを包含する幻覚的・経験的経験のことです。その形態は、視覚的あるいは聴覚的・感情的・触覚的だったり、思考や運動が惹起されたりするなど多様です。この種の幻覚的・経験的経験は、「神秘体験」とも呼ばれ、これは「超越体験」

とも呼ばれています。また、宗教的経験における精神病様の超越的現象の発生を説明するモデルは開発されていません。ただしその幻覚については、催眠における暗示による現れるそれとの関連が一般的に指摘されています。宗教的経験とする傾向と被暗示性の高さとの正の相関が見られるからです。

さらに重要なものは、麻原の破壊的活動が彼の宗教的経験とより密接に関係する可能性にあることです。宗教的経験は攻撃性と結びつくと、殺人の傾向を帯び得ると研究者が指摘していられます。これはつまり、宗教的経験は脳神経の電気的揺動と関係があると考えられ、その経験の際に攻撃性と司る脳神経の部位も揺動すると、経験者は殺人に至る場合があるというのです。

この攻撃性を孕む宗教的経験は、声めらるいは衝動・命令の形として、この攻撃性を孕む宗教的経験は、アピラケツノミコトとして戦うように神から命づけられたという麻原の経験も、この種の宗教的経験に含まれているのです。

麻原が語る宗教的経験も思い起こします。確かに、攻撃性との結びつきを疑わざるを得ません。たとえば麻原は説法、あるいは武装化に関する会合の場において、自身の前生を物語ることがあります。たが、そのテーマは「戦争」であることがしばしばでした。その典型的なパターンは、「戦った世界」に基づき、その内容に「この物語は、麻原が見た「ガイジヨン」に基きました。ガイジヨンは瞑想中や睡眠中に現れる夢のようであり、その内容に宗教的意味合いを包含し、非常に鮮やかで記憶に長く残ります。この際立った「通常の夢」は一線も画する「特徴」が長ります。そのためオウムにおいては、ほかの宗教的経験と同様に、現実的経験として認識されていきました。たとえば、信徒はあがガイジヨンも見ると、それは前生の出来事であること、実感としてしまう状態だったのです。

このようにガイジヨンの経験について、戦争のテーマが目立った。この麻原の宗教的経験は攻撃性と結びつく傾向があった。この

また、幻覚的経験に考え方や行動の変化に伴うのは、状況により異なる。たとえば、幻覚的経験に考え方や行動の変化に伴うのは、状況により異なる。この場合、そのような変化は必ずしも伴わない。そのような変化に伴うのは、たいていは精神的葛藤などの内的要因のために幻覚が生じる場合である。

- *1 Marc Galanter, 1996, Cults and Charismatic Group Psychology. In Edward P. Shafranske Eds., Religion and the Clinical Practice of Psychology. American Psychological Association.
- *2 Michael A. Persinger, 1987, Neuropsychological Bases of God Beliefs. Praeger.

えられよう。その傾向が、麻原の行動に影響を及ぼしている。可能性は否定できないのではないだろうか。

宗教的経験に関する文献を渉猟しますと、このように麻原の該当するところが散見されます。私感と述べさせていただきます。その文献から得られる知識は、私に述べたように接したことが、麻原論よりも、麻原の言動を検討するにあたり有用でした。後者では、麻原が破壊的活動に至った一因として、大学受験に失敗した経験が、引き合いに出されます。つまり麻原において、その負の経験が累積された結果、社会に対して憎悪を募らせたということができます。

しかし麻原は、自動小銃の製造に関する会合の場で、「物理学は日大への教養が、いんたんとか、わしも理系が好きで物理とは縁が深いんだ」といって、実に嬉しうに大学受験の思い出を語り、ためです。その話は、大学受験の経験がなく、参考書とは縁が薄かった私には到底ついていけない領域にまで及びました。この様子から考えるに、大学の受験は、楽しい記憶として、自身の向上と夢見ることでできたという意味で、麻原の胸に刻み付けられていたのではないうか。少なくとも、殺人事件の動機になるようなコンプレックスとしてわだかまっていたとは思えません。

そして、これが最も肝要なことですが、麻原が意思した全世界への攻撃に直結する動機が、従来の「麻原論」には見当たらないので、す。麻原論が動機として掲げる「かゝる彼の脛の傷も、その狂気の沙汰との懸隔を問われれば、たまたま説得力を失わざるを得ない」という、薬事法違反の罪に問われたこと、世界中の人々を「ポア」するこの間に、脈絡を見出すのは困難です。私が知る限りにおいて、直接動機として説得力を持つのは、麻原の宗教的経験——アビラケツノミコトとして戦えと神から啓示も受けた経験——以外にありません。

宗教的経験に係わるこの状況は、オウム教の信徒について、まありは、信託もまた、幻覚的な宗教的経験が豊富だったかです。信徒は教義ごおりの宗教的経験としていたために、教義の世界観を現実のことで認識していき、現代人が三悪趣に転生することを、それを救済する能力も麻原が具有することも、麻原の説く教えは一切が現実でした。そのために信徒は、破壊的活動を命じた麻原の指示に従ったのです。人々の救済と認識して。

この理由で私は、オウム関係者が教義の宗教的世界観に対して抱

*1 もつとも、そのように宗教的経験が麻原に起る原因は不明だが、*2 したがって後述のように、オウムの宗教的世界観における麻原の立場と信徒のそれは異なる。

述べていた「アリテイ」の観点から、オウムによる破壊的活動を

し、か、今のような見方には抵抗を覚える方もいらっしゃるかも知れませんが、オウムが事件と起こした動機として指摘されるのは大抵一般的な犯罪動機——組織の維持や組織内における保身などであるため、このような見方にはむしろ状況が社会に存在するからです。また、一般的な犯罪動機は多くの方にとって、日常経験する心情に共通する部分もあるのです。なごみのない宗教的経験よりも理解しやすいためからうかす。人は自身の経験に基づいて物事も理解するものですから、このような傾向が生じるのは無理もありません。

信徒にとりて、教義は現実だった。——
それでもこれは、私の個人的見解にとまりません。事実、事件に関係した信徒・元信徒（以下、元信徒被告人と記します）に接した取調べ官の中にも、このような見方をする人が存在するのです。たゞえは、ある検察官（以下、A検事と記します）は、私に証を明かしました。信徒にとりて教義は現実であり、この教義に従って事件も起こした。この点でオウムの事件は、ほかの犯罪組織のものとは違う。また、信徒にとりて教義が現実となった原因は、瞑想体験下ではないかとも。

A検事は、これが理解できらるまでに二年間かかったと述べていた。数百時間にわたり、多くの元信徒被告人を取り調べて初めてわかった。
A検事は、オウム真理教が起こした事件の公判を一九九六年から一九九八年にかけて担当し、検察側証人となる元信徒被告人と証人テストする立場にありました。共犯関係にある元信徒被告人らは、検察側証人として互いに、相対的な公判に出廷する状況だったのです。A検事から前述の話も聞いたのも、私が証人テストを受けた場におい

た。検察官は証人テストにかなりの時間も費やしてまいりました。たゞえは三時間半の主導問のみに、私のべ四〇時間以上の証人テストを受けました。が、あまりゆる角度からの質問をいたしました。弁護側、検察官は私に對して、あまり耐え得る尋問とすることを許さず、弁護側は本番の公判において、証人テストの場では確認して、おたことでも、この質問すれば証人はこの答えるだらうとの予測さえ可能でした。それほど深く、検察官は事件を把握しようとしていたのです。事件の背景に至るまでも、このように徹底した証人テストを経て、A検事の目の前に、信徒

の真の姿があまり出されたのでしよう。
*1 証人テストとは、証人がどのような供述をするか公判前に調べること。
*2 自動小銃製造事件の証人として、麻原公判に出廷したときのこと。地下鉄サリ
ン事件の証人として初めて出廷する前には、さらに長時間の証人テストを受けた。
*3 もろろん、事件の取り調べの中で、信徒すべては把握できなかったらう。

